

ベラーの洞窟

民話

フオルクスメルヒエン

ルートヴィヒ・ベヒシュタイン著

鈴木満訳・注・解題

十六世紀の半ば頃のこと、靴屋のヨナス⁽¹⁾親方はテューリンゲン⁽²⁾なるアルンシュタット⁽³⁾で食うや食わずの暮らしだった。生まれた時からまずまず男一匹のこの歳に至るまで、なんかこう悪意を持った運命に付き纏^{まと}われているあんなばい。早く両親に死に別れたが、残された資産なんぞこれっぽっちも無い。靴屋の職人^{ゲゼレ}として他郷に出掛け、ニュルンベルク⁽⁴⁾、アウクスブルク⁽⁵⁾、フランクフルト⁽⁶⁾等等といった大きな自由帝国都市⁽⁷⁾で仕事をやって来た。もつとも、父祖の町に戻りたい、としようちゅう憧れていたから、いくらかの貯えができることを懐に、旅杖を押っ取り、故郷^{ふるさと}へてくてく帰ったわけ。間もなくちっほけな家を買ひ込み、親方の権利を獲得、諸道具を揃えた。さてヨナス親方となつてみれば、どこぞに操正しい娘はいないかな、とあいなり、この探し物は代父^{パイト}シルデックナーの子である貞潔な乙女エリーゼ・バルバラ⁽⁸⁾に落ち着いた。この娘は敬虔で淑やかで善良、もつとも物質的な富には恵まれておらず、新たに店開きした夫に婚資として持参したのはまことにもつてささやかなもの。しかしながら二人とも、せつせと両手を働かせて実直に生計を立てて行こう、神様が子どもを授けてくださるなら、神様を畏れ敬い、品行方正な生涯を送るよう躰^しけることができますように、というのが念願。ちっほけな家を買ひ込み、婚礼を挙げ、新居の家具調度をし

つらえると、ヨナス親方の貯えは綺麗さっぱり無くなつたが、挫けるどころか、倦まずたゆまず仕事に励み、伴侶のリースヒェンは誠心誠意その介添えに当たる。彼女が巧みな手わざで婦人用の靴を縫えば、夫はもつと荒い仕事をこなす。間もなく彼らは一段と素晴らしい家庭の幸せに恵まれることになり、ヨナス親方はまたひとしお熱心に稼ぎ、愛しい女房に向かつて、もつと体をいたわらなきやあいけないよ、としげしげ言つたもの。でも、こちらは嬉しさ一杯の目付きでご亭主の取り越し苦労をひよいといなすのだった。エリーゼは母親になつた。おつかさんそっくりの可愛らしい男の子で、彼女の膝に抱かれて、父ちゃんにきゃっきやと笑い掛ける。薔薇色頬つべのちびちゃんが両親の足許に座り込み、「床に転がつている」古い長靴や上履き靴を玩具にしていると、仕事はいつもずんずん捗る。こうして一年が平穩無事に過ぎ去つた。そりゃ贅沢なんぞはこの矮小な家に足を踏み入れることはなかつたが、愛と健康は住人から離れたことはなく、満足と喜びがささやかな食事にはばしば風味を添えたもの。二人目は女の子で、小さな家族の数と夫婦の喜びを増やした。その時、悪性の熱病がこの町の子どもたちの間に蔓延。ヨナス親方のちびたちにも襲い掛かり、まずさつさと女の子を奪い去つた。病いの床に就いた男の子の枕元で四週間というもの、懊悩する両親は祈り続けた。彼らの胸はその前の子どもの死で張り裂けんばかりだったが。しかし、哀訴嘆願は役に立たず、死の天使は男の子を天に連れて昇つた。そこでは妹のちっちゃな魂が可愛い薔薇色の雲にふわふわ乗つかつて、お兄ちゃんを迎えに出たもの。男の子の顔は穏やかに蒼褪め、甘美な夢が廻りに漂っているかのように、死んでからもなお微笑みを浮かべていた。悲嘆に沈む母親は小さい頬を撫でさすつたが、これは死の冷たさ。彼女は可哀そうに高く悲鳴を挙げると、魂の抜け殻となつた愛児の臥床の傍らで失神した。

この子の埋葬が済んで、ものの一週間も経っていなかつた。不幸せな両親は宵も更けた頃、寂しい小部屋に黙りこくつて座っていた。外では嵐が轟轟と荒び、窓の隙間からひゅうひゅう吹き込んだので、洋灯の焰はたえずちらちら

揺れ、そのため壁に奇妙な影が動き回っているように思われた。働き疲れてエリーゼ奥さんの両手は膝に垂れてしま
い、目は段段閉じて行つた。ヨーンナス親方はふと仕事を脇に置くと、食器棚(1)から聖書を取り下ろし、精巧な彫刻で飾
られ、詰め物をした革張りの大型安楽椅子を机にもっと近づけた。戸外の嵐はますます荒荒しく猛り狂い、諸処の鎧
戸をがたがたさせ、家家の屋根から瓦を落とした。ヨーンナス親方は黒革の縁無し帽を脱ぐと、両の手を組み合わせ、
聖書をひもとき、詩篇第九十篇(2)を敬虔に読んだ。

「しよ、なんじ 汝は常に我らの隠れ家にてまします。山いまだ生り出でず、汝いまだ地と世界とを作りたまわざりしと
き、永遠とこしえより汝は神なり。」

汝人を死なしめてのたまわく、人の子よ、汝ら帰れ、と。汝の前には千年も既に過ぐる昨日のごとく、夜間よのまの一刻ひとしじ
に同じなればなり。

汝これらを大水のごとく流れ去らしめたまう。彼らは一夜ひとよの眠りのごとく、早くも枯るる青草のごとし。朝あしたに生
え出でて早くも枯るるなり。しかして——」

——「火事だあつ」という声おのが戦おのきに満ちて通り中に響き渡つた。「火事だ、火事だ」と繰り返しての叫び。人人
が横丁を馳せめぐる。太鼓の連打と鐘の唸りがこれに混じり、凄まじい悲鳴を嵐と競う。仰天したヨーンナス親方が鎧
戸を押し開くと、天に宙する血紅色の輝きが小部屋をさつと照らした。

「ああ、イエス様」。ヨーンナスのおかみさんは両手を揉み絞り、震えながらおろおろ歩き回つた。その時火の手が近
隣の家家に襲い掛かり、がつがつと屋根を舐め、乾いた破風はふを燃やすと、とてつもなく大きくなり、突風に煽られて
二、三本の通りにばちばちと拡がつたかと思うと、再び天をも焦がさんばかりに燃え上がった。くぐもつたずしんと
いう音がし、それから幾つもの声が入り混じつた絶叫が聞こえた。燃え尽きた家屋が倒壊し、労働者を何人か押し潰

したのであった。もう五軒が焼け、焔がこの小さい家に向かった。ヨーンナスのおかみさんは僅かばかりの寝具を敷布に包み、急いで助けに来た数人の友だちが、夫婦の晴れ着が入っている柏材の櫃を家から担ぎ出してくれた。ヨーンナス親方は聖書を手になると、大変なごったがえしの中を妻を連れて脱出した。折から二軒目と三軒目ががらりと崩れ、ヨーンナス親方のちっぽけな家も間もなく炎炎と燃え上がった。

エリーゼ奥さんの従兄の一人が慈善心を發揮、焼け出されの二人を自分の住まいに迎え入れ、一部屋をあてがった。エリーゼ・ヨーンナス夫人は二十二歳で、まだ花の盛りの美しさだった。そもそもこれが情け深い従兄——以前女房を虐待して死なせちゃったことがある——が彼女に対して優しい関心を抱くに至った要因。彼は大きいちやほやすることによってこの関心を表明、どんな底意を持っているかこの可愛い若妻に、遠回しなんかじゃなく気づかせたのである。ヨーンナス親方はこやつにとつて目の上のたん瘤だったから、他の親方衆の許で賃銭稼ぎをするよう強いられ、帰って来るのはやつとこ昼と夜だけという始末。彼が戻ると、従兄のヨースト——稼業は亜麻布織匠¹³——は苦虫を噛み潰し、なんのかのとぶつくさ言い散らしては、そこいらの扉をばたあんと閉める。エリーゼ奥さんはすぐと相手の底意を見抜いたが、余計な心配を掛けまい、と夫には何も言わなかった。来る日も来る日も、ヨーンナスが留守になるたび、従兄殿は貞節な妻を囮¹⁴しくも恥知らずな科白^{せりふ}で責め苛み^{さいな}、彼女が、夫に打ち明けます、と脅すと、家から出て行け、そうすれば——とこやつはぬかしたものの——路地で寝る羽目になるかもな、と威嚇するのだった。一度などは我を忘れて、実力行使に及び、彼女を「ひっくりかえそう」としたが、これは身のためにはならなかった。エリーゼ奥さんは小さな可愛らしい握り拳^{こぶし}を拵^{しら}えて、相手の顔にしたたかな一撃をお見舞いしたので、こちらは唇と鼻から血がたらたらのでいたらくとなつて、急いで彼女を放した次第。冗談だつてば、と言い紛らしはしたが、中心ひそかに報復を誓う。人に言い触らしたいことを、こりゃあくれぐれも秘密にな、とおしゃべりする連中はその時代

から既に存在した。今日ほど多くはないにしてもね。こういう手合いに向かってヨーストは、かのうら若き女性の内緒のご厚誼に与っていることを自慢、ただし、こいつはおおつぱらにしないでくれや、と頼んだわけ。

三日と経たないうちにもう、一人の友だちがこのでき立てほやほやの噂話をヨーナス親方に伝えたし、かみさん連中や娘っこどもは噴泉の端「井戸端」で何の咎も無い奥さんを断罪した。哀れな靴屋の萎れかけた愛の喜びの花をあつさりへし折るにはこれで充分。子どもたちは死んでしまい、小さな家は烏有に帰し、金も無ければ、暮らし向きが良くなる見通しも無い。そして真心籠めていとおしんだ女房は不貞を働くと来ている。これ以上過酷な運命の打撃がまたとあろうか。夕方遅く家に戻ると、従兄は意地悪で陰険なにやにや笑いで、リースヒェンは無邪気で明るい眼差しで彼を迎えた。けれどもヨーナスは妻にただいまもろくすっぽ言わずじまい。それどころか、妻の澄んだ碧い瞳を見ると、心中に疑念が萌すのだった。彼はいらいらと、どうしたよいものやら見当も付かぬまま、床に就いた。すると夢を見た。散歩に出掛け、高い巖から転落した。ところが素晴らしく綺麗な男の子が彼を引き留め、ずっと遠くのとある草原に連れて行った。男の子は草の中に座り込んで、遊び始めた。彼も一緒に遊ばなければならなかった。男の子は金貨をどっさり持つていて、それを草の中に投げけるのだった。ヨーナスは探さなければならなかったが、見つけたものは彼のものになった。突然妻のエリーゼもそこにいて、男の子と遊んだ。すると大きな蛇が一匹、草叢から出現、妻に巻きつくくと、その心臓に飛び掛かった。けれども男の子が黄金の笞で蛇を打つと、蛇は死んで下に落ちた。ヨーナス親方は驚いた。そして蛇が死んで落ちると、はっと目が覚めた。まだ真つ暗な夜中だった。また寝入って、今度は熟睡したので、翌朝、この日は日曜だったが、奥さんは夫が起きるまで長いこと揺さぶらねばならなかった。ヨーナスはもう夢のことは覚えていなかった。

この時従兄がやって来て、どうにも気の毒だが、といった様子を装い、夫婦に、家を出てもらいたい、と告げた。

なぜそうするのか、との埒も無い口実の数数には不自由せぬ。惨めな二人は立ちすくんで、お互いを見つめ合った。エリーゼは愁いと不安の眼差しで。なにしろ夜の宿りがなくなつたのだから。ヨーナスは忿懣を胸に秘めて齒を喰いしばり、帽子を手に取ると、一言も言わず、歩き出した。

天気は晴朗だった。ヨーナス親方は快適な谷間に足を踏み入れた。どちらを向いても葡萄が支柱に絡んでいる。彼は物思いに沈みながら進んだ。考えが千々に交錯する。間もなくとある高い巖頭に立つたが、これは垂直に屹立してぞつとするような奈落を見舞かせる。あと一歩でヨーナスは谷底でこなごなになってしまふ。その時目に見えない誘惑者が近づいて、こう囁いた。「何をぐずぐずしているのだ。おまえの苦しみにけりを付けてしまえ。神はおまえを見捨てたのだから」。これに対して内なるより良い声が言う。「忌まわしい遣り方で人生を終わってよいものか。そして女房をあゝ誘惑者の手に任せてよいものか」。するとまたしても誘惑の声。「おまえの女房は再婚できるさ。それともおまえ、物乞いになって土地から土地へ彷徨い歩き、その上、他の男の子どもたちを養つてやろうつてのか」。そこで邪な者の声がより良い感覚を凌いだ。

「神よ、わたしの罪業を許したまえ。そして女房の面倒を見てやってくださいまし」。そう祈つたヨーナス親方は恐ろしい断崖の前に進み出、目を瞑つた。——この瞬間、力強い手にぐいと引き戻され、乱暴に地面に転がされた。同時に背中を一つしたたかにどやされるのを感じた。がばと跳ね起き、憤慨して殴つた者を振り返つたが、それでも自分がまだ山の頂に居るのが心中嬉しかった。と、てもさても奇妙な衣装を纏つた一人のちっぽけな男の小人が頭上の絶壁の上に立つており、死ぬほどの大笑いに取り掛かっている。この時ヨーナス親方は自分が見た夢のことを思い出した。

「あんたはだれだね」と彼は消え消えの声で小人に訊ねた。なにしろ怖くて全身ぞくぞくしたからで。

小人は呵か呵か大笑しているため返事ができないでいたが、高い崖からぱつと飛び降りるなり、仰天しているヨーナスの隣に立ち、ぐるりと一回転して、こう言った。「わしと一緒に来るがいい。散歩いたそう」。それから、どうして巖頭から身を投げようとしたのか問ひ質したが、そうしながらも滑稽な舉しかめつ面に終始。いくらか気を取り直したヨーナス親方は悩みごとのありったけを縷る縷る物語った。愁嘆の顛末てんまつを話し終えると、「おぬしはばかだ」と小人はのたまうたが、それきり黙って、またよたした足取りでひたすら前を行く。

そこでヨーナスは仔細にあちらを観察した。ちびすけで、その両足は胴体に較べるなんとも変てこりん、脛はトルコ人の彎さいベル刀みたいに半月形である。皿型の鉤ぼたんの付いた黒い上着を一着に及び、襟ははだけていた。両眼は一對の眼鏡の玉のよう。髪の毛の色は鈍い鼠色に近く、頭には先の尖った黒い小さな縁無し帽を被っている。ヨーナス親方はこれまでこんな小人についぞお目に掛かったことはない。彼は勇気を出して、小人の上着の裾を引っ張り、相手がさつと振り向いて、じつとこちらを凝視すると、「あんたはなんて名前だね」と訊ねた。するとちびすけはそっくり返り、むかつとした様子じようすでこう言った。「わしはヒューゲルパッチュヒューと申す。したがそれがおぬしになんの関わりがある」。そうして射るような目付きで睨にらんだので、ヨーナス親方はまことに気味が悪くなり、それからはずつとだんまりで通した。

小径こみちは荒涼寂寞せきぼくとなる一方。両側は禿山で、真昼の太陽は燃えるような熱さで照りつける。ヨーナス親方は奇妙な案内人を道連れにしたことをだんだん後悔し始めた。やがて小人は立ち止まり、口笛を吹く。すると樺木りんぼくの生垣の下に枯れた草叢から三匹の緑色の蜥蜴うがひが跳び出し、小人の体に駆け上がった。小人は蜥蜴たちを手に乗せ、二言三言もにやもにやと眩くと、また走り去らせた。それから道は谷から出て上り坂になり、険しい山を登ることになったので、ヨーナス親方は小人の後に跟ついて行くのがやっとなつた。頂上に着くと、またしても両脇が崖になったので、頭の骨

をおっぺしよる危険が付き纏った。けれども妙ちきりんなちびすけはますます足を速め、漸く立ち止まった。ヨーナ親方が息せき切つて後を追ひ、そこまで辿り着くと、相手は巖の中に通じている穴の前に立っていた。「わしはここに住んでおる」とヒューゲルパッチュ殿は言つた。「一緒に中へ入れ」。そして電光のように狭い開口部に跳び込んだ。

ヨーナ親方はびくびくものでこれに従つた。しばらくの間腹這いで進まねばならなかつたが、とうとう洞窟は広くなり、立ち上がることができた。侏儒の皿ツヅエルクのような目玉はこの暗闇の中で光を発していた。いわく「もうすぐわしらは遠路遙遙やつてまいつた目的地に着く。そしておぬしにやこんなに歩いたのを後悔させんよ」。

侏儒ツヅエルクが三度巨おおきな巖の割れ目を叩くと、これはぐぐつと開いた。ヒューゲルパッチュは怖くて物も言えないヨーナの手を取り、中へ入らせた。すると狭い扉はまたさつと閉じた。ヨーナは立っているのもやつと。なにしろ世間から隔絶されて、生きながら埋葬されたのだから。しかし案内人はしっかりと彼を導いて無数の階段をどンドン深くに下りて行つた。

やがて二人が足を踏み入れた広い平地は一面穏やかな薄明かりに照らされていた。空の色はしかとは分からず、緑と青と灰色とが入り混じつたもの。太陽も無ければ月も無い。ふさふさした苔が地面を覆い、そこを幾筋かの白銀のように輝くせせらぎが横切つている。辺りを森閑とした静けさが支配、ただ時折見舞うかせない遠方から琴の響きのような音が聞こえて来る。遠くを見ることができないのは、銀灰色の霧ツユの面紗ツユエルが全てを覆つて神秘にほんやりとさせているからで。

「怖がるでない」とヒューゲルパッチュはヨーナに言つた。「おぬしがおるのは善良王と添え名される侏儒王ツヅエルクヘリーア(19)の地下の王国でな。剣呑けんおんなことに遭わせはせぬ」。この時堂堂たる建物が霧の中から現れ、頭でつかちの

侏儒たちが何人も二人の傍を忍びやかに通り過ぎ、和やかな樂の音が聞こえて来た。

彼らは宮殿に入った。ヒューゲルパッチュが余所者を伴つて姿を現すと、一同うやうやしくあとずさつた。この宮殿内の壮麗さはなんとも素晴らしかった。四壁は金属製の鏡でできており、床は貴重な大理石の板を敷き詰めたもので、これには目も文にきらめく宝石類が象嵌されて多彩で美しいさまざまな形を描き出している。やがて二人の僕が高い広間の幾つもの扉を開け放つた。何千もの灯火が、輝く枝付燭台と鏡の壁とから、皓皓と来着者たちを迎えた。広間の中央にある卓には全侍臣を従えた王が豪華な装飾を施した雪華石膏の椅子に座し、お妃である小さな素晴らしく麗しい女性侏儒が並んでいた。両者とも、巧みな伎倆を凝らし、真珠と金剛石を鏤めた黄金の冠を戴き、その衣装にはこの上なく典雅な刺繍が施されていた。王の左側の席が一つ空いていたが、ヒューゲルパッチュはボヘリア王の御前で深深と三度お辞儀をし、王の隣に腰を下ろした。侏儒の宮廷の全ての貴顕・貴婦人が王の総理大臣に低頭した。ヒューゲルパッチュはそうだったのだ。一同壮麗な身なりだった。彼らは銀糸で縫い取りをした黒い平らな鍔無し帽を被り、これに金剛石の留め飾りと色とりどりの羽根の前立てを付け、当時の最新流行に従い、黒い短上着と寛やかな半洋袴を纏い、鼠の皮で綺麗に縫い上げた手袋を嵌め、黒い朝鮮鼠の毛皮製のちっちゃな可愛い半長靴を履いていた。二十四人の豎琴奏者が明るい広間のぐるりに座り、二十四人の僕たちがあちこちでご馳走を運び、二十四人のこよなく愛らしい侏儒の乙女らが小さな水晶の酒盃にひっきりなしになみなみと繰り返しお酌をして廻る。ヨナス親方も座らざるを得なかった。だれもが愛想よく笑い掛けたので、恐怖は消え去り、愉快に美酒を傾けた。やがて王が合図すると、二十四の豎琴が見事な和音で斉奏され、白銀のように清らかな声で豎琴奏者が歌う。

暗い大地の懐深く、薄明の中に我ら棲む。

黄金の太陽、また月の優しき光を仰がずに。

されどここでは争いが我らを分かつこともなく、
静かな平和が続くのだ。

地下はいつでも穏やかで、地上は常に不和ばかり。
とりどりの花が咲き匂う、明るい地上は綺麗だが、
選り抜きの水晶が光を放つ地底もやはり美しい。

地上の民の貪欲が、宝を地中に埋め込めば、

我らの手許に落ちて来て、小人の民のものになる。

彼らが倦まず探すもの、地底深くの寶石や、

金や銀やは全てこれ、我らが守護するものなるぞ。

されど無害な鉱夫らをお化けはたまた悪戯で決して脅かしたりはせぬ。

悪党だけを懲らしめる力を神は与えたが。

憎しみ、妬みに苛められ、人間族から逃げて来た

者を我らは庇護しよう、我らが正義を与えよう。

万歳、ボヘリーア、我らが王、王に欲び授けたまえ、

万歳、良王、正義王、偉大な王よ、万万歳。

弦の響きは次第に消えたが、王の息災を祈って打ち合わされた、巧みを凝らした水晶の酒盃は、まだ妙なる余韻が

鳴り止まず、そのうちしんと静まり返った。その時ヒューゲルパツチュが立ち上がり、三度鄭重に腰を屈め、耳を傾ける一座にヨーナス親方の苦しみの顛末を物語った。こちらはその間小さな人人の面相の觀察(25)に耽り、胸の裡(26)で大笑いしていた。なにしろ、ある者は小さな目、縫い針に通せるくらいに尖った小さな鼻で、右肩にはでかでかとした瘤を背負い、またある者は盤広(27)な顔と平べったい鼻の持ち主で、下唇が上唇より一ツオル半(28)も突き出している。そうかと思うと、鼻が唇の上までぶらさがっているというのもの。さてまた全員脚は彎曲(29)、家鴨(30)みたいになよたよた歩き。

さてヒューゲルパツチュが語り終え、王の御前で低頭すると、王はこう叫んだ。「施物掛(31)、この氣の毒なヨーナスを宝藏(32)に案内いたし、黄金の延べ棒七本、白銀の延べ棒七本、金剛石(33)を七個、七掛ける七本の真珠の頸飾りを遣わせ」。すると大蔵大臣は仰せ畏(34)んだ。王の宝藏に足を踏み入れた時、ヨーナスはなんと驚いたことか。きらきらと磨き上げた多面体の金剛石、紅玉(35)、青玉(36)、そしてありとあらゆる寶石の夥しい色の輝きに真つ向から迎えられた彼は、燦然(37)たる容器や道具類の数をいくら眺めても見飽きなかった。施物掛である大蔵大臣、銀色巻き毛の愛想の良い小柄な侏儒(38)が、にこにこしながら極めて貴重な寶石と金銀をあちこちの衣囊(39)一杯に詰め込んだ上、一緒に饗宴の間に戻ってくれた時、ヨーナスの氣持ちといったらなんともかんとも。善良王ボヘリーアは立ち上がり、ヨーナスに、近こう寄れ、と合図、こちらが御前に片膝突くと、こう言った。「そちはこれで人間に望むことができる物を悉皆(40)手にしたわけじゃ。王侯のごとき身にもなれようが、余の忠告に耳を貸す氣があるなら、今のままでおるがよろう。そして余はずっとそちの友でいようぞ。そちのためにちよつとした畑を杭で囲っておく。この山の麓にの。これをそちに取らせる。豊かな稔りがあるはず。そちの妻はこれまで貞節を守って来た。楽しい未来がそちを待っている。だれにも言うでないぞ、どうしてこうした幸せに巡り合ったか。これからも正直者のままでおれよ。では、息災でな。思い出のよすがに余の愛用の酒盃を遣わす。これで酒を酌むたびボヘリーアを偲んでくれい」。

すると麗しい侏儒ツエルクの女王オルゼリア26が歩み寄り、こう言った。「この指環をお取りなさい。そしてそなたの最愛のひとにあげるのです。わらわからよろしく、とね。彼女が何か助けを必要とする折には、指に嵌めたこれを廻すだけでよい」。それからボヘリアは百合を象かたどつた王笏おつしやくで幸せなヨーストに触れた。と、彼は深い眠りに陥った。

目を覚ますと、彼がいたのは飛び下りようとしたあの巖の下。町の鐘が十二時を告げた。夢を見たのではないか、と思ったが、衣囊ポケットの重みが、そうじゃないんだ、と納得させてくれた。すっかり心も軽くなり、意気揚揚と家路を急いだ彼は、あつげに取られている従兄に家賃を支払い、手回しよく綺麗な住まいを借り受けると、貞節なエリーゼとともにそこへ引き移った。ヨーストは授かった幸運をちゃんと用心深く隠しおおせなかつたので、妬み屋どもの注意を大いに惹き付けた。最も中傷を試みたのは従兄で、なんともひどい噂をばらまいたが、その一方、あさましいおべっかを尽くして連日金持ちの靴屋に付き纏い、上辺うわべを飾った関心ぶりでヨースト親方の裕福さが何に由来するのか穿鑿せんさくした。こちらはこの厄介者から逃れたい一心、くれぐれも内密に、という条件で、とうとう顛末の一部を明かしてしまった。と、同じ日の宵にもうヨースト親方は、これ以上織匠の椅子に座って糸紡ぎなんかする気は無く、手っ取り早く金持ちになろう、と思い、乙女ユングフアーシラシラシクの跳躍27——つまり、ヨースト親方があの親切なヒューゲルパツチュに出逢った巖はそう呼ばれているのだ——を目指して歩いていった。ヨーストは、だれも出て来ないかもしれない、とも考えたのだが、なんかこう闇雲に駆り立てられたのである。巖のてっぺんに着くか着かないかのうちに、二人の不恰好ふかつてうな地の精グノームども28が地中からよつきり姿を現した。そこでヨーストは驚愕のあまり死人のように蒼褪めたが、なんとか勇気を奮い起こして深深とお辞儀をした。しかしながら妖魔たちは挨拶なんぞにかけ構いなく、ものすごい嘲笑を浴びせるなり、逆らう相手を引つ摑み、崖下へほうんと放り投げた。ヨーストは氣を失った。これを別の連中が受け留め引つ張つたり、ひっかいたりして失神しているのを正氣に戻した。それから谷を抜けてまっしぐら、茨いばら、薊あざみのきら

いなくそれらの上を引きずって山に登ると、かの巖穴の前にやって来た。そこでこれまた他の者らが出迎えた。その容姿たるやいよいよもって異様醜怪。彼らはヨーストを白銀の鎖で縛り上げ、頭に黄金の冠を載せたが、いや、その冠の重いことといったら、ほとんど地べたに押し潰されんばかり。それからまたしても出て来たのは無慮無数の侏儒ツヅエルクの群でその王も一緒。これらがヨーストを前に押し立てて、一同地面の上にふわふわと音も無く拡がる。この広い谷間でヨーストに聞こえるのは掛けられた鎖のかちやかちやという澄んだ響きと自分自身の聲音あしおとだけ。侏儒は皆黒装束で、短い剣を佩おび、銘銘片手に枝無し紡シニヒンネンクぎ草ラウト（原注）の花咲きはこる茎を一本持ち、その白銀のような花が月光に明るく輝いていた。行列は町を指していたが、とある高い山に來ると、正義王ボヘリアは腰を据え、配下の者たちはその両脇に居流れた。谷の底まで、目路の及ぶ限り侏儒たちが密集していた。

さて一方ヨースト親方はどうも良からぬことを予感。すぐ戻るから、自分のことは心配しないでおくれ、と妻に告げると、穏やかな月光に照らされた、静かな谷へと出掛けた。侏儒ツヅエルクの全ての民がそこに集っており、高い玉座には王が座り、また不実な従兄が鎖に繋がれているのを見て、彼はなんとも驚き、急いで登って行った。「あの者は死罪に当たる」と裁判官の侏儒ツヅエルクが厳かな声音で言った。「突き落とせ」。鎧ツヅエルクに身を固めた二人目の侏儒が近付き、絶望したヨーストをむんずと掴んだ。その時ヨーストは王の足許にがばと跪き、「お慈悲を、王よ、お慈悲を」と懇願した。すると王の額に掛かっていた逆鱗げきりんの暗雲は散り散りになり、彼はにっこりして、こう言った。「そちを滅ぼそうとしたあやつのためにそちが願うのであれば、あやつは許して遣わそう。したが」と命拾いをしたヨーストに向き直り、こう続けた。「我らの手から逃れることができるとは思わな。また、新たな悪巧みを再び企もうともな。そのほうは自分から我らの支配下に入った。我らはそのほうがいずれへ参ろうとも見つけるぞ。いずれの地でもそのほうを罰することができるのだ」。王が語り終えると、低い豎琴ハルツェの音色が響き、和やかな音色は、宵の微風ゼウイロスに運ばれてさざめい

た。

万歳、ボヘリーア、我らが王、王に歡び授けたまえ、

万歳、良王、正義王、偉大な王よ、万万歳。

そして突然、王も裁判官も侏儒たちも消え失せた。銀色にきらめく霧の面纱が谷間を漂って行き、やがて遠くで消え失せた。従兄のヨーストはヨーナス親方の足許に泣きながら崩折れ、犯した悪事の数を告白し、命を助けてもらったことを感謝し、ひたすら許しを乞い、幸せに恵まれた方は相手を許してやった。

何日かあと、ヨーナスはもらった畑に出掛け、その状態を検分しようとした。すると、これがもう耕され、鋤き返されているのを発見。しかし親切な侏儒たちは一人も見つからなかった。

ヨーナス親方は貞節なエリーゼとともにこの上もなく幸せに安樂な暮らしを送った。陣痛の時一度だけ、静かな夜更けに、エリーゼは指環を廻してあの親切な女性侏儒に助けを求めた。王妃はまめまめしく介添えしてくれ、彼女は可愛い女の子を分娩。その後エリーゼは次から次へ六人の子どもを産んで愛しい夫を喜ばせた。この子たちは皆成長して、幸せになったのである。ヨーナスはたびたび子どもや孫らに囲まれて、自分を破滅から救ってくれた善良な侏儒たちの話を物語り、善良な王がくれた優美な酒盃を感謝しながら傾けて一同の健康を祈ったもの。この話を聞き、ひとつ運を開こうと、あの谷へ入った者はたくさんいたが、何も見えず、何も聞こえなかった。ヨーナス親方は八十四歳で世を去り、多くの人人に追悼され、同胞市民の全てに賞讃された。なにしろ敬虔で働き者、慈善を施し、親切だったから。アルンシュタット近郊の例の美しい谷は彼の名にちなみ、今日に至るまでヨーナス谷と呼ばれて

おり、そこにある高い巖の一つ、ポヘリーアが法廷を開いたあの巖は王の玉座ケーンヒシユエトワール⁽³¹⁾という。ヨナス親方の物語によつて知られるようになったポヘリーアなる名は後に縮められ、まずバエリーア(32)、それから更にポエラー(33)となった。谷の背後にある巖穴はいまだにペーラースロホ⁽³⁴⁾の穴あるいはペーラースヘーレ⁽³⁵⁾の洞窟と呼ばれている。しかし巖板はもはや左右に開くことはない。

故老たちはいわゆるペーラーの小人たちについてたくさんのことを語る。月光の中で畑を耕しているのを目撃した、と主張する者も少なくない。今は何も出現しないが。ただし、どこぞの農夫が「麗シュエーネンの泉ンネン」の(36)前に長逗留をつかまつり、かつ、麦酒ビールの杯を覗き込み過ぎた場合、ふらふら家路を辿りつつ、侏儒ツヅエルクの洞窟の入り口の向かいにある小さい灌木のところに来ると、背後から抱きつかれたような気がして、もんどりうってぶっ倒れるとか、ひゅうつと吹いて来た風が彼の黒い帽子を攫さらつて行つちまうので、半時間もそのあとを追っかけなければならぬとか、何か重い物がどさつとおぶさつて来て、最寄の村のエスペンフェルト(37)のほど近くまでそいつを背負つて行かねばならぬといったようなことは時折起こるのだ。あの辺りでおちやらかされたり、道に迷つたりという御仁がけっこういる。というのも、あの静かな谷間にいると人界から隔絶されているような感じがするので。さて、奇妙キテ奇天テ烈レな地の精たちが相も変わらず大いに本領を發揮しているのか、あるいは、もう連中が姿を現わさないとところを見ると、どこか別の居留地を選んだのか、これについては問題にしないでおきましょうね。

原注

紡スピン糸ケン草クラウ Spinnkraut アンテリクム・リリアゴ・リンネ Anthericum Liliago. Linn.(38)

訳注

- (1) ヨーナス Jonas. 「モーナ」Jonaとも。旧約聖書ヨナ書に出るヘブライの小預言者。神ヤハヴェが、大都市ニネヴェ(ティグリス河左岸にあった古代アッシリア帝国の首都)に赴き、そこが悪行のため滅びる、と伝えよ、とヨナに命じた。しかし、ヨナはその命に背き、逃亡しようとして船に乗ったが、神の放った暴風に遭遇、諦めて同船の人人に自分を海に放り込ませる。ヨナは大魚に飲み込まれ、三日三晩その腹中において悔い改める。そこで魚は陸地に彼を吐き出し、ヨナはニネヴェに預言をしに出掛ける。とは申せ、この人物が物語の主人公に何らかの形で投影されているわけではない。主人公の名は「ヨナス谷」に由来する。
- (2) 親方 Meister. 職匠。手工業組合(北部ドイツではギルト、中部ドイツではイヌンク、南西部ドイツではツンフト)の組合員。手仕事を身に付けようとする少年と年季契約を結び、徒弟Lehlingとして一定期間修行させる資格を有する。年季奉公を終えた者が職人Geselle。これは元の親方の許を離れ、自由意志で各地の親方のもとに住み込み、伎倆に磨きを掛ける。これが旅修行期間 Wanderjahre。
- (3) アルンシュタット Arnstadt. 中部テューリンゲンの大都市。エアフルトの南方二〇キロほどのところにある。ベヒシュタインは一八一八年ここを振り出しに、以降マイニンゲン、バート・ザルツンゲンで薬剤師主任助手を十年勤めた。十九世紀の人口二万ほどか(二〇〇六年現在二万五千余)。テューリンゲンの豪族の一つだったシュヴァルツブルク・ゾンタースハウゼン家のかつての城下町。ほどほどの産業基盤を持ち、伝統ある文化の中心で、保養地でもある。古くはヘルスフェルト家の代官としてケーフェルンブルク伯爵家が治めていたが、一三〇六年シュヴァルツブルク伯爵家の手に渡り、同家は一七〇六年までここに宮廷を開いていた。ローマの軍事殖民諸都市以外ではドイツ最古の由緒(七〇四年古文書に初出)を誇る。エアフルトやアイゼナハとともにバッハ一族のゆかりの町でもある。
- (4) ニュルンベルク Nürnberg. 現在バイエルン州。ミュンヘンに次いで州内第二の大都市。中部フランケン^{ミッテルフランケン}の由緒ある都市。一〇五〇年には既にその名が文書に登場している。一〇六二年市場開設権を取得、一二一九年王都として承認され、以来しばしばドイツ王の滞在地となる。ニュルンベルクは北から南、東から西への交易路の交点に位置し、一二五六年ライン都市同盟の一員となり、一五〇〇年頃には二万以上の住民を数え、金属加工、交易(一二五〇年以降は特にイタリアとの)などの諸産業は早くから栄え、いくつもの名家がこれに従事した。
- (5) アウクスブルク Augsburg. 現在バイエルン州。ミュンヘン、ニュルンベルクに次いで州内第三の大都市。紀元前一五年皇帝アウグストゥスの治下、ローマ帝国の軍事屯営地として出発。名称アウグスタ・ウインデコルム。帝国最盛期には一万二千ほど人口があったとか。一五〇〇年頃の人口は三万ほど。ケルン(四万)、プラーク(ポヘミア名プラハ、三万)に次いで神聖ローマ帝国最大都市の一つだった。イタリア、特にヴェネツィアとの交易の要衝としてフツク家に代表される大商人たちの活動で栄えた。
- (6) フランクフルト Frankfurt. フランクフルト・アム・マイン Frankfurt am Main. すなわちマイン河畔のフランクフルト。現在ヘッセン州最大の都市(人口六十六万七千余)。ドイツ連邦共和国で五番目に大きい都市。七九四年カール大帝の古文書にその名が現れ、一二二〇年神聖

ローマ帝国直屬都市となる。中世中期（最盛期）以降ここでローマ王、神聖ローマ帝国皇帝が選出され、戴冠された。一五二〇年の人口は約一万だった、とのこと。

(7) 大きな自由帝国都市 strobe und freie Reichsstädte 「自由帝国都市」は「神聖ローマ帝国直屬都市」のこと。帝国直屬諸侯と同じく帝国議会に出席する権利を持ち、近隣諸侯の掣肘を受けない自由独立の都市。なお、中世ヨーロッパにおいて「大きな」というのは、ドイツ語圏を基準とすれば、人口一万以上であろう。

(8) 代父 ^{パトリテ} Vater, キリスト教の幼児洗礼に立ち会って、洗礼を受ける者の神に対する約束の証人となる大切な存在。男であれば代父 ^{パトリテ} Vater (名付けの父)、女であれば代母 ^{ゲフアムター} Mutter (名付けの母)。名付け親は当の嬰兒にとつては将来ともに両親同様、あるいはそれ以上に頼りになる。早くに両親を亡くした若きヨハナスにとつて、シルデックナートつあんは最も親しい人間だったわけ。

(9) エリーゼ・バルバラ Elise Barbara. エリーゼの愛称は後に出る「リースヒェン」Lieschen。

(10) 「床に転がっている」古い長靴や上履き靴 十八・九世紀オランダの風俗画における靴屋の場面にはこんな図柄がある。「」内は訳者の補足。

(11) 食器棚 Kamrick. Kamrick であろう。これならグリム『ドイツ語辞典』に gestell für kannen として記載されている。ただし「液体容器、缶、ポットなどを載せる棚」である。

(12) 詩篇第九十篇 旧約聖書詩篇。以下の和訳は訳者の手許にある文語訳日本聖書協会発行『旧新約聖書』とはかなり異なっているが、できる限り、ベヒシュタインの原文に即し、また、右の文語訳に近づけて訳した。

(13) 亜麻布織匠 Leinweber. 植物の ^{ライネン} Lein, Flachs の纖維を原料とする糸で布を織る職人・親方。亜麻から作られた布は ^{ライネン} Leinen (フランス語 リニエール Linère)。これが訛って日本語「リンネル」で、古くは ^{ライネン} Linen と。

(14) わたしの罪業 キリスト教にあつては自殺は罪業である。

(15) むかつとした様子で 名前にはそれ自体力がある（「名前の魔力」Namenzauber）ので、名前はうかうかと明かすものではない。超自然的存在は名前を知られると無力になる。

(16) ヒューゲルパッチュ Hügelpatsch. 「丘のぼちゃばちゃ」。

(17) 樺木 Schleendorn. 現代の綴りでは Schleidorn あるいは Schlehe となる。薔薇科の常緑喬木。高さ五メートルに達する。堅核、^{カネツボ} 柎核と ^{ヒトツボ} 柎核と ^モ も。

(18) 侏儒 Zwerg. 英語の dwarf に当たる。通常丘の中など地下に住み、金属を精錬、宝石を掘り出して、見事な装飾品や刀剣を作る。醜く、魔法の心得がある。古英語 dweorg、古代北欧語 dverg, 語源はよく分からない。古代北欧叙事詩『エッダ』によれば、原初の巨人ユミルの

屍骸に生まれた蛆のような存在である、とのこと。地下の自然力的人格化であろう。短軀なのは勿論だが、頭が胴体に較べて大きく、手は長くて頑丈、といったところか。

(19) 侏儒王ボヘリーア Zwergekönig Bohelir. 未詳。

(20) 四壁は金属製の鏡でできており、ベヒシュタインはヴェルサイユ宮殿の「鏡の回廊」に着想を得たか。あちらはガラスの鏡だが。

(21) 女性侏儒 Zwerghin. 侏儒 Zwergh は男性形。この種族には元来女性はいないようで、女性形 Zwerghin は一般的ではない。しかし、いつか彼らはブリテン諸島ではありふれた存在である妖精 fairy (これは男女がちゃんという) と混同され、昔話ではその属性も持つことがあるから、女性の小人があつても不思議はないか。

(22) 神 ein Gott. 単数形だが不定冠詞が付いている。従つてキリスト教の神ではない。

(23) 人相の観察 Physiognomien. 観相学 Physiognomie は十八世紀後半の西欧で流行した学問。ムゼーウスはたとえば、個人的には高く評価していたスイスの神学者ヨハン・カスパー・ラーヴァター (一七四一—一八〇一) 著『人間知識と人間愛促進のための観相学に関する諸断章』全四巻 *Physiognomische Fragmente zur Beförderung der Menschenkenntnis und Menschenliebe* (1775-78) に、『ドイツ人の民話』の中で再三触れ、あるいはその内容を仄めかして、からかっている。ベヒシュタインの脳裡にもこれがあつての言及だろう。けれども、ヨナス親方こんな態度を取らせたのは感心しませんな。総理大臣ヒューゲルパッチュが声涙ともに下る口調で自分の哀れな身の上話をしてきている最中なのだから。もっとも、作者ベヒシュタインが小人族の形状についての知識をこうした遣り方で読者に披露したかったんだ、と考えると、この場面を許容してやるべきかも知れない。とにかくこれを書いた時ベヒシュタインは二十歳そこそこ(かく若かったことだし)。

(24) 一ツオル半 ツオル Zoll は古い長さの単位。インチに同じ。地方により異なるが、一般に二・五四センチ。しからは一ツオル半は三・八センチ強。

(25) 施物掛 Spendenmännchen. 「施物掛」Spentemann の縮小形。従つて「小人の施物掛」が正確な訳。施物掛は王侯の側近で、教会への途次などで喜捨を乞う貧民に、王侯に代わり布施をする御仁。

(26) オルゼリア Orselia. 未詳。

(27) 乙女の跳躍 Jungfersprung. 淫らな男に追い掛けられて進退窮まった乙女が、巖頭から別の巖頭へ跳び移つて難を逃れた、という伝説(解題参照)がこうした名称の由来だろう。なお、グリム兄弟編著『ドイツ伝説集』一四二「乙女の跳躍」(これは別の土地、オーストリア中部のシュタイアマルクの話)によれば、乙女は川を越えて対岸の丘まで跳んだ、となつている。ちなみに、南西ドイツの美しい都市フライブルク・イム・ブライスガウ近くに険しい巖壁の間を切り抜いて狭い街道が通っている場所がある。ここは、その昔、獵師に追われた角鹿が、巖壁から巖壁へ、街道の上空を横切つて跳んだとつて、「角鹿の跳躍」Hirschsprung と呼ばれている。もともとこれだつて、絶対不可能な跳躍距離

離だが。

(28) ^{グノム} Gnom. 地中に棲み、金銀宝石、鉄や銅を掘り、これを加工して素晴らしい工芸品を作る。醜い小人とされる。ただし女性形グノミーデ Gnomide は美しいとのこと。人間をからかうこともあるが、大抵は親切にしてくれる。コーボルト Koboldとも言う(家の精のコーボルトとは異なる)。

(29) 枝無し 紡ぎ草 ^{アスロース} astloses Spinnenkraut 「シユピンネ」を「蜘蛛」とも訳せるが、白く可憐な花を咲かせるのに、「蜘蛛草」ではどうにも不似合いなので「紡ぎ草」とした。訳注「アンテリクム・リリアゴ・リンネ」を「蜘蛛」とも訳せるが、白く可憐な花を咲かせるのに、「蜘蛛草」ではどうにも不

(30) ヨーナス谷 ^{ヨルダ} Jordal. 中部アエーリンゲンのクラヴィンケルからアルンシュタットにかけて走っている谷。ヴィルデ・ヴァイセ川が貫流。この川は貝殻石灰岩層を部分的に深く浸蝕し、ところどころ険しい崩落斜面を形成。第二次世界大戦末期ナチス・ドイツはここでブーヘンヴァルト強制収容所(ヴァイマル近郊)の囚人たちを夥しく使役して何らかの秘密工事を行った。

(31) 王の玉座 ^{コングスツール} Königsstuhl. 未詳。

(32) バエリーア ^{バエラー} Baeller. 未詳。

(33) ボエラー ^{ボエラー} Boeler. 未詳。

(34) ペーラーの穴 ^{ボヘルスロフ} Bohlersloch. 未詳。

(35) ペーラーの洞窟 ^{ボヘルホーレ} Bohlershöhle. 未詳。

(36) 「麗しの泉」の前に vor dem Schönenbrunnen. 定冠詞が付いているので既知のもの。従ってアルンシュタットの住人は先刻ご承知の固有名詞である。しかし、これが実際の噴泉であり、ここではその前にある居酒屋を指しているのか、あるいは居酒屋の屋号自体(後者の場合は、店内ではなく、店の前、すなわち外の椅子・卓で飲む、と解釈)なのかは、原注が無いので分からない。前者ではないか、とは思うが。

(37) エスペンフェルト ^{エスペン} Espenfeld. 「白楊の原」の意。現在アルンシュタットを形成する地区の一つで最小(人口一六〇)。東のゲラ谷^{ケル}谷と西のヨーンナス^{ケル}谷に挟まれた高台(ほぼ標高三八〇メートル)の窪地にある。

(38) アンテリクム・リリアゴ・リンネ ^{アンテリクム} Anthericum lilago. Linn. 原注 Lilago の頭字 L を小文字 l に改めた。ドイツ語名 Traubige Graslilie は「葡萄のような草百合」の意。和名は未詳。百合科。草丈約五〇センチ。五月から七月に掛けて六つの花弁に分かれた白い花を咲かせる。

解題

「ベーラーの洞窟 —— 民話」の原題は *Böhlershöhle. Volksmärchen* である。

ベヒシュタインはベラーの穴に棲む小人族に関する本来の伝説については別の場で報告している。『テューリンゲン地方の伝説群と伝説圏』 *Der Sagenschutz und die Sagenkreise der Thüringerlandes* (一八三五—三八) 第三卷 (マイニンゲン、一八三七) 第二節所収の一八「ベラーの小人たち」 *Die Böhlersmännchen* と一九「乙女の跳躍」 *Der Jungfersprung*、および、『ドイツ伝説集』 *Deutsches Sagenbuch* (ライプツィヒ、一八五三) 所収の一八九「乙女の跳躍」と五八六「ベラーの小人たち」がそれ。しかしながらこの物語においては、尊敬措くあたわざるムゼーウスの饒舌な流儀に倣って伝説の素材を昔話風に語ろうと試みた。従兄弟同士の間柄だが、片や善良で貧乏、片や邪で金持ちという対比を持ち込んだのは多分そのためであろう。特に亜麻布織匠のヨーストが靴屋のヨナス親方と同様の幸運に与ろう、と小人たちの許に向き、さんざんな目に遭わされるのは昔話の図式に基づいている。